

# 日本のエネルギー政策と 原発対応を巡る三猿・四痛



IMF-JC 事務局長  
若松英幸

人形姫で名高いコペンハーゲンの中心部に国会議事堂として使用されているクリスチャンボー城がある。正面玄関の上部には苦しそうな男性の彫刻が四つあり、政治が良くないから「胃が痛い、頭が痛い、耳が痛い、歯が痛い」と言うのだと、1996年の訪問当時にガイドから説明があった。日光の「見ざる、言わざる、聞かざる」の三猿を思い出し、強く印象に残ったのだが、最近の原発事故対応を見るにつけ、この言葉が蘇る。前者は「国会議員は元気で国民のために働きなさい」という警告の意味であるし、後者は「Three wise monkeys」として、古代エジプトをはじめ世界各地に存在、解釈は国によって微妙に異なるが、日本では、悪いことがあっても目をつぶっている、というようなニュアンスで使われる場合が多い。

現在コペンハーゲンの街を訪問しても、昔と変わらない美しい街並みが保存されていて、国造りの素晴らしさを改めて実感するが、一方、海を隔てたスウェーデンとの国境付近に行くと、おびただしい数の風力発電のプロペラ群が出現して圧倒される。村や地域で一つの風力発電ごとに出資を募り、国の電力買い取り制度を利用して配当を行う制度もあるため、急速に普及したとの事であった。さらにデンマークは、2050年までに化石燃料に一切依存しない社会システムの構築を目指す「グリーンデンマーク」の政策を推進中である。かつて、世界をリードした日本の太

陽光発電や風力発電などのグリーンテクノロジー分野が、見るも無残に欧米や中国に取って代わられる姿に胸が痛む。韓国経済の急進もそうであるが、新しい仕組みや事業の加速には、政策的な支援が不可欠と言わざるを得ない。

話は変わるが、今年の5月に日本を代表する黒部ダムと黒部川第四発電所(クロヨン)を見学した。富山県の宇奈月温泉から入り、トロッコ列車や岩盤の中のエレベーター、バッテリーカーなどを乗り継ぎクロヨンを見学するコースで、限られた人数を関西電力と富山県が公募し催行している。吉村昭氏の小説「高熱隧道」で名高い黒部第三発電所の工事現場や、岩盤をくり抜いて作ったクロヨンなど、急峻な黒部渓谷の景観とも相まって、見る者を圧倒する。クロヨンには4台の大型発電機があり、発電量は最大35.5万KW(常時8.8万KW)、黒部川水系10か所の総発電量を合わせて89万KWという説明であった。最新の原子力発電所135万KWに比べれば規模は小さく、しかも常時発電するための水量が確保できないため、日中の電力ピーク時対応が主な役割との事である。

3月11日に発生した東日本大震災以降、再生可能エネルギーがようやく世間の耳目を集めるようになった。しかし、日本のエネルギー供給に占める太陽光や風力などの再生可能エネルギーの比率は3%程度であり、大幅な拡大が急務であるが、併せて不安定で多様な発電システムを有効利用するスマートグリッドや、大規模揚水発電システムなどの整備が急がれる。さらに、各国間で電力の融通が利く欧州

と異なり、日本は狭い国土の中で周波数が異なるなど、隣県への融通さえも支障をきたす有様である。石炭・石油・天然ガスなどの化石燃料は、国際情勢の変化によっては供給がストップすることもあるし、価格高騰の懸念もある。今でさえ国際的に高い電気代が、さらに高騰する事態も憂慮される。

日本は資源の少ない国で、最大の資源である優秀な「人」を武器に、ものづくり立国として世界と闘ってきた。いま日本は、エネルギーの安定供給面での不安から、企業の一層の海外進出が危惧されており、雇用の基盤を国内に残せるか否かの正念場にある。長期的に安定したエネルギー政策や、インセンティブを含めたグリーンエネルギー拡大への政策強化、新成長戦略に盛り込まれたグリーン・医療・安全事業などへの早急な産業構造転換など、産業革命を大胆に展開する必要がある。

将来の世代へ、安心して生活できる国や地球を残すことは、我々に課された義務である。原発事故の対応を巡っては「三猿」を乗り越え、過去や現在に目を閉じることなく正しく事象を把握・公開し、新たな安全のシステムを構築する必要があるし、「四痛」を政治への不満に止めることなく、国民自らが責任と役割を発揮して安心して暮らせる国づくりにまい進することが焦眉の急である。



黒部川第四発電所に向かうバッテリーカーの前で、JC地方ブロック代表者一同